

# 富山県図書館を考える会会報No.47

## 小矢部市が1校専任配置になりました

小矢部市では平成14年度より学校司書が6名配置されていましたが、大規模校は1校専任で、小中規模校は2校兼務でした。けれども平成21年に策定された「小矢部市子ども読書活動推進計画」には、「学校図書館司書の1校専任配置を目指します」と明記されました。期待して待った22年度は増員がありませんでしたが、今年度はとうとう3名の学校司書が新たに採用され、1校専任での配置が実現しました。

兼務の中でも熱意を持って誠実に仕事をされてきた学校司書の方々と、未来ある子どもたちのために豊かな教育環境の創造に努められた小矢部市教育委員に敬意を表し、深く感謝申し上げます。



## 司書のいる学校図書館の風景

学校図書館には子どもたちが集います。

本を読み、学習をし、ほっと一息つきに。

そんな学校図書館の風景を学校司書が伝えてくれました。

今回は注目の **小矢部市** の学校図書館司書からの便りです。



## 専任配置で“瞬間”を逃さず

平成23年4月より、小矢部市内の各小・中学校の学校図書館に司書が、ようやく専任として配置されることとなりました。

5ヶ月が過ぎようとしていますが、読書としての本に関する問い合わせが10数件、授業に関する調べ学習としての資料の問い合わせが5件と、学校図書館司書が毎日在室しているからこそ対応できうる事例に、学校図書館司書としての存在意義をひしひしと実感しています。

生徒が資料について問い合わせようとした瞬間や、学校の図書館にはないあの本が読みたいと思った瞬間はその瞬間でしかありません。その機会を逃さず、的確(?)にアドバイス・対応できるのは、そこに学校司書がいるからです。それらをふまえ、今後も生徒たちの貴重なその“瞬間”を逃さないように、学校図書館業務に従事していきたいと考えています。  
(メルギューくんの友達)

## 司書初心者マークの今年は何?

初めて学校図書館司書になりました。しかも、今まで未知の世界だった中学校。なんだかよく分からないまま、おろおろうろしたまま時間だけが過ぎ、あっという間に1学期が終わりました。きっとこのまま1年間が過ぎていくような気がします。

初心者マークの私の今年の目標はこれです。「先生方と仲良くなる」「生徒に笑顔で声をかける」  
図書とは全く関係のない目標です。でも、これがないとやっていけない…先生方や生徒のみなさんと仲良くなることは、図書館の運営に、そして「ひとり職」の自分にはすごく大切だと思うのです。まだまだ目標にはほど遠い状態ですので、2学期もがんばりたいと思います。

そして、ぬいぐるみを飾ったり、迷路を貼ったり、クイズを出したり…中学校なのに子どもっぽいかな?と思いつつも、図書室を心安らぐあたたかいスペースにしたいと試行錯誤しています。

(図書室おもてなし課)

## 先生、本っておもしろいね

新年度がスタートしたある朝のことです。私は図書室利用の先生にあいさつをしました。「今年から毎日おはようございますのあいさつができますね。」と言われ大変嬉しく思いました。1校専任になったことを実感しました。

それから数日後の休み時間のことです。急ぎ足で3年生の男の子が図書室に入ってきました。「先生、カエルの飼育の本ありますか?」と尋ねてきました。書架へ案内する私の後をついてくる彼は「教室でカエルを飼いた

いのです。」と言いました。「教室で、カエルを飼うの？」と聞くと「2限目の理科の時間に外でカエルをつかまえてきたのです。」と言い、会話は続きました。カエルの飼い方について参考になる本を手渡すと彼はニコニコ顔で本を抱えて図書室を出て行きました。

また、ある日、テーブルで読書をしていた女の子がカウンターにいた私と目があいました。彼女は「先生本っておもしろいね。」とニコッと一言、言いました。私はうなづきました。

「読みたい、知りたい、ホッとしたい」に応える学校図書館、学校図書館の可能性を広げていけるよう、日々努めていきたいと思えます。  
(そらいろのたね)

## 人がつながる学校図書館

図書室にほぼ毎日一人で顔を出す1年生の女の子がいた。彼女は4月当初からの常連で、一人でやってきては私に、どの本が面白かったとか、このキャラクターが好きであるといった他愛のない話をしていく。私はとても読書を愛している様子の彼女の会話に応じながらも、毎日一人で休み時間を過ごしていることが多少気がかりであった。彼女との会話で、しばらく経ってから分かったことは、彼女は他の地域からの転校生で、小学校からの持ち上がり式のこの中学校の生徒たちの中になかなか馴染めないでいるようであった。「前の学校の友達と別れたのは、少し寂しかった。」とこぼしたのを聞いたときは、胸が締め付けられたような気持ちになったのも事実である。

ある昼休みの時に、たまたま図書室で彼女と、そのクラスメイトが居合わせたことがあった。そこでいつものように私に話しかけてきた彼女との会話の途中で、私はクラスメイトの女の子たちにも話を振ってみた。すると、その女の子たちも会話に応じてくれ、その子たちと常連の彼女とを交えた会話が弾み、楽しいひとときを過ごした。

その後日、彼女と、例のクラスメイトの女の子が図書室にやってきて、新着図書のコーナーで本の話を楽しんでし合う姿を見受けられた。お互い読書が好きなら同士、話が合ったようだ。友人と楽しそうに話している彼女の姿を見たとき、以前からの心配はすっかり拭い去られてしまった。

学校司書として、図書に関すること以外に、こういった人と人を繋ぐようなことも可能であるのだと気付いた。担任の先生や教科の先生以外の、保健室の先生などといった、「自分に評価を下さない大人には弱い面を見せられる」と学生時代に心理学の授業で教わったことがあるが、それは学校司書に関してもいえるのではないか。生徒たちを見守る立場として学校に存在できることを私はとても誇りに思えたエピソードとなった。

(名前：K)

● 小矢部市では、3年前から県図書館協会長の参納哲郎さんを講師に迎えて、教育委員会主催の子どもの本の研修会が継続して開催されています。小矢部市の学校司書とボランティアを中心に、近隣の砺波市や高岡市からも参加される、好評な講座です。

1年目は「学校図書館概論」、2年目は「レファレンス事例検討」、そして3年目の今年は「授業を支える学校図書館づくり」がテーマです。

昨年、引用されたレファレンスの中には「小学生向きの本曾義仲の伝記図書を知りたい」という書誌調査や「富山県内の過去の気温について調べたい」という事実調査など、学校図書館のカウンターでも問い合わせがありそうな、小矢部市や富山県の事例なども検討されました。

今年度は、本格実施された新学習指導要領の内容とすりあわせながら、教科別に学校図書館の活用方法を探っていく内容になっています。これまでに「理科」と「算数・数学」「国語」が終わりました。

今後は9月28日・10月26日・11月16日・12月21日・1月25日・2月22日のいずれも水曜日に開催されます。時間は午後3時20分～4時10分、場所は小矢部市総合会館（小矢部市・城山町1-1 石動図書館併設）1階会議室です。

問い合わせは生涯学習課 Tel（0766—67—1760）にお願いします。

● 専任配置が先に進んでいる砺波市では、今年も塩谷京子先生（関西大学初等中等高等部学校図書館教育主任）の講演「"しらべる力"を育てる学校図書館活用法」が開催されました。（8月11日）

塩谷先生の連続講座の実施は、専任司書配置を活かした学校図書館の動きに、司書教諭や教科担当の先生方を大きく巻き込みんでいくことが期待できます。

砺波の見識の高い施策が、富山県内すべての自治体のモデルになっていくことを期待します。

## 朝日町でも学校司書の配置が始まりました

朝日町で、今年度6月より「住民生活に光をそそぐ交付金」を活用しての司書配置が始まりました。

この町で、25年ぶりに新しい町長が誕生したのは平成22年5月でした。考える会では、その3ヶ月後に新町長をお訪ねし、学校司書の配置をお願いしています。町長は朝日町以外の県内すべての自治体で、学校図書館に関わる職員が採用されていることにひどく驚いておられました。けれども「非常勤職員では置きたくないね」という言葉とともに、苦しい財政の中で、学校司書配置に民意を得ていくことの難しさも語られました。

それから5ヶ月後の12月、考える会は交付金活用を求める要望書を町長宛に郵送しました。そして、23年度の予算の中に「学校図書館に司書を新たに配置」が盛り込まれ、1名の職員が採用されることになりました。採用された職員は、8時間勤務の嘱託職員です。今年度は1中学校と3小学校（24年度に2校に合併予定）を巡回します。「交付金で取り組みやすくなった。配置の理解も図られていくことでしょう」と担当課は回答されています。

結果として、**富山県内のすべての自治体に学校司書が配置されることになりました。**

## 金沢市で学校司書の配置が始まりました

金沢市の小中学校に学校図書館司書を派遣する事業が7月11日に始まりました。司書配置は山野新市長の選挙公約のひとつに挙げられていたため、市教委は本年度、非常勤職員として採用した司書21名を小中学校83校に週1～3回派遣することにされました。学校図書館教育推進モデル校（3小学校、2中学校）を指定し、利用しやすい図書館づくりを進めながら、貸出冊数の増加、図書館を活用した授業実践など、学習センター機能の充実が目指されるようです。先進的に学校司書配置を進めてこられた石川県ですが、ずっと懸案だったのがボランティアを中心に運営されていた金沢市の小中学校図書館への専門職の配置でした。地道な活動を続けてこられた市民の方々に敬意を表し、共に喜び、金沢市の大きな流れを活用させていただきたいと願います。

## 国の動きも活潑です

学校図書館活性化協議会を設立・・・

超党派の国会議員や民間の団体が協議会を成立させました。学校司書の全校配置や司書教諭の専任化、読書指導と図書館活用ができる教員養成、新聞配備の促進などを目指して、政策提言や啓発活動を行うことをねらいとしています。会長に自民党衆院議員で、元文科相の河村建夫氏、副会長には資生堂名誉会長の福原義春氏が就任されました。

片山総務大臣が講演・・・

7月13日、東京都内で開かれた特別講演会（文字・活字文化推進機構など主催）で、司書を1人も置かない学校図書館があることについて、「図書館の役割と機能を十分に発揮できない。地方自治体は（予算の）優先度合いを間違えている」と述べ、全校に司書を配置すべきだとの考えを示されました。

国立国会図書館の書誌データ（JAPAN MARC）が平成24年1月から無償で使用できるようになります。

無料で書誌データが使用できれば、遅れている学校図書館蔵書のデータベース化が進められたり、余った予算を別の形で活用できる余裕も生まれるかもしれません。

詳細は、文字・活字文化推進機構のHPトップにあります。<http://www.mojikatsuji.or.jp/>

## 学校図書館で育てほしい子どもの力—言葉の発達を中心に

江藤裕子（富山県立保育専門学院非常勤講師）

家庭文庫開設が22年前、図書館を考える会設立が17年前、活動が認められて保育士養成機関で授業を担当するようになったのが12年前です。私の担当科目は、保育内容の中の「言葉」です。

1日に9つの言葉を記憶していくと言われる乳幼児の有り様を保育士の卵たちに伝えるため、当たり前のように「言葉の発達」の解説が授業内容に入ります。そこで日頃、短大生に教えている乳幼児の言葉の発達を通して学校図書館で育てほしい力について述べたいと思います。

ただ、「言葉の発達」には諸説がありますし、市民として学校司書配置を切望してきた思いとからめるため、多少独断での記述になりますが、どうぞお許しください。

### ○ 言葉の発達のビル

3F 思考の言葉を使う時期（10～18歳） コミュニケーションと気持ちを語る言葉の完成
2F よく話す時期（3～10歳） コミュニケーションと気持ちを語る言葉の練習
1F よく言葉を聞く時期 （受精後4ヶ月～5歳）

参考：岡本夏木著「ことばと発達」岩波新書 表作成：江藤

### ○ 言葉の発達のビル・1F

乳幼児は能動的に言葉をつかみ取って育っていくと言われます。しかし大人が日常的に使う言葉は、使用頻度が多くても種類が少ないため、子どもたちは大人の発する言葉にすぐに興味を無くしてしまいます。

私は、以前に4歳と5歳の兄弟ケンカの際に聞いた、兄に負かされてしまった弟君の言葉が忘れられません。彼は「兄ちゃん、にほんのやりでめだまをでんがくざし、おおきな石でにくもほねもこなごなにふみくだくぞ！！」と叫んだのです。

このように、幼い子どもたちが大好きなのは意味はよくわからなくても、とにかくカッコいいという言葉です。そんな言葉を日常生活で使うには無理がありますから、子どもが興味を感じる豊かな言葉を聞かせるためには本を読んであげることが必須になります。

そして5歳を越えると「耳から聞いた言葉を使って映像を創造する」という、大人の耳と同じ機能をもつようになります。そのため、さし絵のない本の朗読や昔話の語りを楽しめます。その経験の蓄積が後に、活字を目で追うと映像が浮かぶという能力に発展していくのではないかとされています。

この豊かな言葉を聞く時期がきちんとできあがると、発達のビルの2階が積み上がっていきます。

### ○言葉の発達のビル・2F

獲得した言葉を自由に使って、コミュニケーションを楽しむ時期です。この時期に要注意なのは、大人の質問方法です。「昨日は楽しかった？」は、どのように答えても良いオープンな質問ですが、「1+1は何？」は答えが限定されたクローズな質問です。小学校入学より、子どもたちはクローズな質問ばかりにさらされて行きます。この質問方法は、コミュニケーション意欲を萎えさせることが指摘されています。学年が上がるにつれ、コミュニケーションを楽しめない子どもたちが出てきますので、オープンな質問を心がけて使用してくれる大人が学校の中には必要です。

そして、コミュニケーションの言葉を磨いていく時、子どもたちは模倣した言葉から新しい言葉を作り出すことができるまでになります。この時期に大切なのは、言葉の妙やユーモア、からくりの楽しさを提供してくれる言葉遊びや詩などの本だと思えます。

充実したコミュニケーションの時期を過ごす、言葉が完成する3階が立ち上がります。

### ○言葉の発達のビル・3F

「思考の言葉」が築かれる時期です。思考の言葉とは、具体的に言えば「声を出さずに本が読める」「大勢の前で理路整然と話しができる」「作文が書ける」などの表現が含まれます。1階と2階がきちんと出来上がれば、1

8歳までにこの言葉が完成すると言われます。高校3年生ならば、プレゼンテーションや小論文は楽々こなせて当たり前というわけです。

さらに、思考の言葉が育つ手前、自分探しが命題になり始めた子どもたちは、自分の心を語る必要にかられます。複雑な自分の心を適切に語り、他者からの共感を得なければ、不安と苛立ちで心が張り裂けそうになってしまうからです。このときに必要なのは、自分の心を代弁してくれる本の中の主人公です。自分の心を言語化することの爽快感を与えてくれるのが、等身大の主人公が登場する本なのです。

以上のように、学校図書館では言葉の発達に即した本との出会いが期待できます。

## ○好奇心と知識

言葉の発達と切り離せないのが認知能力ですが、認知に欠かせないのが好奇心です。幼い子どもたちは、いつでもどこでも何に対しても興味津々です。特に好奇心が高まり始める2歳の時期には、物の名前をたずねます。「これ何?」「あれ何?」と何度も聞いて、大人を閉口させます。

まだ生まれて数年しか経っていない幼児が具体的な事物と抽象的な名前を確実に一致させ、自分の知識として取り込もうという作業を精力的に行っているわけです。

それ以後も好奇心は高まり続け、小学校就学前後からは質問はどんどん難しくなっていきます。「僕はどこから来たの?」という哲学的なものから、「お月様はどうして僕についてくるの?」などの現象に関する科学的な質問などです。

このように、子どもの好奇心は、いつでもどこでもわき起こります。けれども、まだ自分の好奇心を確かな知識につなげる力がないので、好奇心はすぐに泡のように消えてしまいます。熱心に質問していたくせに、応答する時を逸すると「何のこと?」などとそっけない返事が返ってきたりします。好奇心は旺盛だけど、好奇心を知識にまで育む技術が絶対的に不足しているのが、この時期の特徴です。

ですから、子どもの好奇心の小さな芽を育て、自分なりの理解を得るまでの援助を行うのは大人の役割です。「もうこれでいいや」とあきらめる子を批判せず、日常的に寄り添ってサポートし、情報を取り込む技術を獲得するまでかかわる専門家、学校司書がどうしても必要な所以です。

司書のいる学校図書館で子どもが獲得できる力は、私は「成長にそった言語能力」と「好奇心を確かな知識に育む力」だと考えます。

(上記は、学校図書館問題研究会会報No.301に掲載されたものです。)

(以下の原稿も同会報No.303に掲載され、著者の参納氏に了承を得て転載します。)

## 学校図書館職員の養成に携わって

参納 哲郎 氏(富山短期大学 非常勤講師)

永く県立図書館と町民図書館へ勤めたほか、短期大学で非常勤講師として「図書館経営論」「レファレンス演習」を、国立大学の司書教諭講習会では「学校経営と学校図書館」を一昨年まで2回担当した体験をもとに、昨今の学校図書館職員の養成事情等を綴ることとする。

### 小学校の図書館利用体験が豊かな学生

富山短期大学では経営情報学科の選択科目として司書資格取得の科目を開講しており、近年は学科定員の約20%に当たる20名前後が履修している。資格取得コースとして受講者がもっと多かった時期もあったが、就職に結びつく機会が少なくなった昨今は受講生も減少傾向にある。

短大の2学年前期の「図書館経営論」の開講に際しては、各自の図書館利用体験を尋ねるアンケートを記入させている。「小中高短大別に5点法で、出身校図書館の評価とその理由」を書かせるのである。結果は、4~5点の高い評価は小学校が約80%なのに、中・高の体験では約20%と逆転する。高い評価の理由は、何れも「司書が親切だった」「面白い本を教えてくれた」など、職員との関わりによる思い出に結びつく事例が多く、「司書になりたい」と志望する学生も少なくない。中学・高校については、図書館の位置が生徒の動線から外れている場合と蔵書が古くて魅力に欠けていたというマイナス要因の学校が多くあるために、利用体験が豊富な学生は少ないように見受けられる。

富山県内の小中学校については、全281校における学校司書の配置率は数年前から95%前後に達しており、特に小学校図書館のカウンターは賑わっていると見られる。これは、市民運動組織である「富山県図書館を考える会」

(1993年結成)が学校図書館への「専門・正規・専任職員配置」を求めて、各市町村教委との交渉等を繰り返してきたこと、県図書館協会が毎年度、司書及び司書教諭の配置状況を調査し、その結果を公表してきたこと等による相乗効果と見られる。したがって、小学生時代から図書館の仕組みを一応体験していきっている学生は確実に増えてきていると感じられる。

しかし、学校司書の実態は市町村によって1日4~5時間勤務や複数校兼務の場合も多くあり、小学校では学校司書の読み聞かせやブックトーク等による読書習慣への導入は図られているものの、調べ学習の日常化は浸透してないと見られる。このことは、短大の「レファレンス演習」を通じて強く感じる点である。

### 「レファレンス演習」で索引の機能を知る

「レファレンス演習」では毎回、一人毎に1問のレファレンス事例を割り当てて、30分以内に自校の図書館蔵書で解決に努め、処理経過・回答内容・質問種別等を「処理票」へ記入のうえ提出させ、直ちに講評を行っている。質問は例えば「十二単を図解した資料がほしい」「三夕の和歌の作者名を知りたい」など、クイックレファレンスを原則としている。回答に当っては、複数の資料を提示できることを奨めており、例えば専門分野の参考図書と事典・辞典類の探索の機会を増やすこととしている。この演習を通じて判ることは、学生は百科事典や複数巻にわたる国語辞典を使った経験が今までに殆どなかったということである。即ち、検索語の選択、索引の利用に不慣れなのである。司書コース後半の演習としては、真に心許ないのであるが、十数回の演習を通じて図書の索引の機能等を生かした探索に習熟することを目指すこととしている。

例えば、学校図書館で調べ学習を実施したとしても、学習テーマがクラス全員共通ないし、グループ毎に同一であったりして、目指す分野の図書類が相当数用意されていない限り、限られた時間内で全員が関連資料にたどり着くのは困難であろう。児童生徒向けの百科事典類も複数セット常備されている学校図書館は少ないので、司書から図書館のオリエンテーションを受けたとしても、百科事典を活用する習慣は蔵書構成と学習時間との関係でも少ないであろう。

### 司書教諭資格受講者の意識

富山大学では司書教諭資格講習を2年度にわたって10単位開講しており、『学校経営と学校図書館』は隔年開講としている。2009年度の受講者75名に対するアンケート結果によると、受講動機としては本人の希望による「自主参加……約70%」、学校・市町村からの「派遣参加……約30%」その他「学生・市民……数名」となっており、大半は何らかの動機・事情によって、学校の夏休み中に資格を取得して、将来にわたって学校現場で専門性を生かしたいという熱心な現役教師が自発的に真夏の連続4日間で30時間の受講に挑戦したことになる。

受講者の所属校としては、小中学校の順に多く、特別支援校の教諭も数名受講していた。次に、自校図書館の課題を複数挙げて挙げたところ、約60%は「読書推進」、約30%が「蔵書資料」、25%が「施設設備」「公共図書館との連携」を挙げていた。読書推進の内容としては、いかに読書させるか、読書率・貸出冊数を高める指導・方策への関心が極めて高いことが判明した。即ち、現役教諭の多くは児童生徒の読書機会を増やすための図書館を目指しており、そのための蔵書、施設の充実方策等を究めたいという意向である。

しかし、学校図書館経営の立場からすると、図書館も各学校の教育目標・方針に従った学習活動の一環として運営されるべきであり、従って図書館運営としては、全校の分掌組織と有機的なつながりのある組織をつくり、学校ぐるみで学習展開に寄与できる図書館運営を図るべきなのである。そこで、講習の終了レポートは「各学校の図書館運営組織づくり構想」という課題を冒頭から明示したものである。レポート内容を見た限りでは、「学習展開に役立つ図書館」への認識がかなり高まった印象を受けた。

学習展開に役立つ図書館づくりは教師集団の意思統一のもとに、図書のみでなく、情報資料等を常備した教材センター化や学習課題に沿った公共図書館や周辺校からの類書・複本の相互貸借システムの必要など、学校司書の力量が問われる場面が一挙に拡大することになる。学習展開に活用される図書館が動きだすことによって、自校図書館の蔵書の充実予算も学校の方針として自ずと増える傾向を辿るであろうというのをこの科目の結論とした。

一つ反省させられたことは、アンケート及び質問として、特別支援校の教諭から「生徒が漸増する中で、施設・資料・司書を充実した例があるか」と問われたことに対して、DAISY図書の知識程度しか応えられなかった不勉強ぶりが反省させられた講習会であった。

### 学校司書には協働精神が必要

学校司書の現場が特異なことの一つは一人職場であること、いや大方は一人以下の職場が現実である。むしろ「専任・正規・専門」の実現が必要なことはいうまでもないが、条件整備の過程にある現下においても、学校司書と司書教諭には本来的に「同じ目的のために他と協力して働く」意味の「協働」する精神とか能力が必要であ

と思う。「協働」の対象は少なくとも次の3方向がある。

- ① **司書教諭との協働**：学習過程の展開に寄与すべき学校図書館としては、日常的に校内教諭との連携は欠かせない筈であるが、少なくとも司書教諭を通じて学校全体の目標・方針に寄与する方策を練ることも必要な能力として、努力によって向上する余地がある筈である。
- ② **図書委員との協働**：学校の委員会活動も教育の一環であろうが、カウンターを当番制などにするよりも、調べ学習の意義や手法を身につけさせる児童・生徒を増やす場としたらよいと思う。さらに、図書委員会のほかに、文化部の一つとして図書部という部活動制も取り入れて、広く部員を募って例えば、「図書館を使った調べ学習コンクール」を図書委員会と共催する協働もできるのではなかろうか。
- ③ **地域の学校司書及び公共図書館との協働**

学校と公共図書館の連携は法の定めるところでもあり、一部の市町村ではネットワークが制度として運用されている地区もある。身近で現実に機能するネットワークは、つまるところ、司書と司書の協働精神なのだと思う。制度化されていない地区においては、有志で始めればよいのである。規模としては、近隣の学校と公共図書館司書の数人程度で、月1回1時間程度の情報交換の場を継続するのが望ましく、実効も体得できるであろう。情報交換の内容は、人気本、レファレンス記録、授業参画、展示・行事予定等とし、これらのメモを必ず交換することとするのがよいであろう。会場は地域の公共図書館が望ましく、公共図書館が受入れようとならない場合は勝手に公共図書館の談話コーナーなどを利用して実績をつくれれば、何れ理解されるであろう。地域の学校図書館を支援できていない公共図書館は、図書館法に照らしても機能未発揮の図書館といわざるを得ない。

上記に挙げた三つの例は、司書資格講習などでは学校司書の役割と図書館間協力の必要性として講義されることも多いのであるが、付随的・建前的な活動として扱われるきらいがあるように思われる。しかし、学校図書館の目的を達成するための手法としては、学校司書が周辺の人々に働きかけて「協働」することこそが、これからの学校図書館前進への途を切り拓くことになると思うのである。

3月19日に予定していました時雨沢恵一氏講演会は、「大震災による深刻な電力不足と停電、それに伴うJR線・私鉄各線・飛行機の運行制限や遅延、また、ガソリンなどの供給不足、物資の不足も深刻になってきており、震災発生以来、日に日に状況が悪化している状況で、講師派遣を行えない」という出版社からの強い意向で、開催中止の判断をいたしました。

事前に申し込みを取っていなかったのも、たくさんの方々の力を貸りて、できるだけの中止告知を行いました。そして当日も、世話人が会場前に立ちました。やはり数十名の方が来場されましたが、皆さんが「仕方ないこと」と納得して下さいました。ただ、とても楽しみにされていたようで、どなたも「今度やる時も教えてくださいね」と言い置きされていきました。

残念な結果になりましたが、好きな作家と出会って作品の背景を聞くという内容は、読書の広がりを楽しんでもらえる良い企画だったのだと改めて思いました。再度実現できるようにがんばります。

ところで、講演会をせっかくの機会と考えられた学校司書有志と図書委員の皆さんが、各学校で作品の紹介などを行って下さっていました。ここにその幾つかの展示の様子と感想の声を紹介します。

## 学校図書館の展示風景

考える会会報No.46でも紹介しましたが、M高校図書館は、時雨沢恵一氏の講演に向けての展示コーナー「キノの旅フェア」と「等身大のキノ」制作に取り組んでくれました。

そしてとうとう・・・2月13日に完成！コートをなびかせたキノが立ち上がりました。

同じM高校とY高校では、「イラストを描く」という美術の時間にも『キノの旅』が取り上げられました。



ある先生は「こんな素敵な物語知りませんでした。19日楽しみです。」と言って下さいました。

ある生徒は「お兄ちゃんが読んでた本だ！教えてあげよう。」と勇んで帰って行きました。

(T小学校)

「本の国がよかった！」「嘘つき達の国がいいよ」とお気に入りの旅の話で盛り上がっています。

(S小学校)





『キノの旅』は昔から好きだったので、この展示を見てたらまた読みたくなった。講演会がすごく楽しみです。などの声が聞かれました。(I 高校)



生徒①時雨沢さんが富山に来るなんて～、(講演会に) 行きたいです！！  
 生徒②ほとんど今まで図書館に来なかったんですけど、今日、ほんと、来た甲斐がありました。すっごく行きたいです！！  
 生徒(多数) (時雨沢さん宛の寄せ書きの紙を見て) イラスト凄い上手！誰が書いたんですか？ すごい似てる！！うまい～ え？1年生女子？ コピック(イラスト用のペンの商品名)使ってる？やっぱりね。

教職員①娘が大ファンだから、このチラシもらって行っていいですか？

時雨沢さんが富山に来てくださるということで、『キノの旅』を急ぎ入荷しました。図書便りやコーナーの様子を見た生徒は、すぐに借りていきます。口コミなどのおかげか、『キノの旅』ブームが広がりつつあります。もちろん3月19日の講演会を楽しみにしている生徒もいます。時雨沢さんファン増加中です！！  
 (H 中学校)



時雨沢氏への贈り物としてキノファンが作成した寄せ書きです。どの用紙からも、『キノの旅』への熱い思いが伝わってきます。

